

現象学研究会

背景

昨年度は、プラトンからはじまりフロイトやリシール、さらにはディディエ・フランクなど、幅広い時代にわたって、現象学と関わる文献を検討してきた。今年度は、現代の哲学のなかでの現象学の位置づけを確認する。着目するのは、思弁的实在論という思想潮流と現象学との関係である。思弁的实在論とは、2007年にロンドン大学ゴールドスミス校において開催されたワークショップをきっかけとしてはじめた思想潮流である。彼らの哲学は、实在を主観との相関関係において理解しようとする哲学(いわゆる「相関主義」の哲学)を批判し、新しい实在論を提唱する。現象学も、思弁的实在論者によって相関主義の哲学として様々に批判されてきたが、現象学者による十分な反論はいまだ提出されていない。本研究会の今年度の活動では、「思弁的实在論者の批判に対して現象学者はどのように応答すべきか」という問題に取り組む。

運営方法

場所: zoomミーティング

頻度: 月に1、2回

形態: ①読書会 ②研究発表・議論

①あらかじめ設定した共通課題についての討議や読書会

②各自の専門分野について初修者にも分かり易く20分で報告 質疑応答と議論

活動内容

フッサール、レヴィナス、ザハヴィなどの現象学関連のテキストやそれに関する先行研究の検討。および思弁的实在論の主要著作メイヤス『有限性の後で』やその紹介者としてよく知られている千葉雅也の『意味のない無意味』の読書会をおこなった。

また、以上の活動を踏まえてメンバー各自の研究分野(フッサールと高橋里美、レヴィナス、バタイユ、分析心理学や芸術批評)についての個人発表をおこない、読書会で得られた観点から各自の発表について議論をおこなう。そうすることを通じて、現象学と思弁的实在論との関係を明らかにし、この両者の論争に対する本研究会なりの応答を試みる。

メンバー・研究内容

査 雨萌(代表)/ 文研・哲学専修/ フッサール・高橋里美
森 敬洋(副代表)/ 先端研/ ユング分析心理学・現代美術
蛸子 良風/ 文研・哲学専修/ レヴィナス
若杉 直人/ 文研・哲学専修/ バタイユ・政治思想
松村 健太/ 神戸大・文研・哲学専修/ レヴィナス
勝田 岬/ 佛教大・教育/ リシール・現象学

各回の内容

・読書会

ダン・ザハヴィ『初学者のための現象学』(全二回)

カンタン・メイヤス『有限性の後で』(全二回)

千葉雅也『意味のない無意味』(全一回)

伊原木大祐「実存の眩暈: バタイユのレヴィナス読解をめぐって」(全二回)

・研究発表

「『全体性と無限』における贈与概念について」(松村)

「ユング以降の分析心理学における「集会的」という概念の再検討」(森)

「高橋里美の哲学について」(査)

「現象学と思弁的实在論」(蛸子)

【通算12回開催】

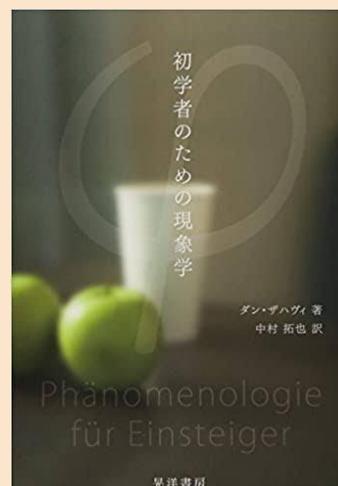
※上記を除く3回は運営計画協議等を実施

有限性の後で

偶然性の必然性についての試論



人文書院



兄洋書房